

## 第 30 回「ユーモア、について考える」(2013/2/11)

場所：電源カフェ BEEZ (渋谷)

司会、文責：野田

参加者：15 人

要約：ユーモア、ブラックユーモアとは、何か、何故必要とされることがあるかについて議論した。ユーモアに対し、ある特定の考えが浮かび上がってきたように思う。またブラックユーモアについても半分程度の時間を使った。

内容：

辞書によれば、ユーモアという言葉は、古い歴史を持ち、徐々に意味が変わってきて、今ではあまりはっきりした意味を持たないことを会の最初に説明した。

### 1. ユーモアそのものについて

- ・ ユーモラスな状況とユーモアは異なる。
- ・ ユーモアは語源が体液である。潤滑油的なイメージがあり、人と人がぶつからないようにする。
- ・ ユーモアは笑いの一種だが、笑いにはペーソス、エスプリ、ウィット、ギャグ、ジョークなど、色々な種類があるようだ。
- ・ ユーモアとウィットは滑稽味があるが、エスプリはスプリットが語源であり、きつきがある。ウィットは機知に富む。
- ・ 文字通りではなく、言葉の裏の意味を取ったときにユーモアを感じる。
- ・ ユーモアには人間味や温かみがあり、上品である。人を傷つけない。感情任せにしない。
- ・ ユーモアは、表現そのものではなく、物の見方であり、物や第三者に対する態度である。
- ・ ユーモアとは、考えられた笑いであって、知的な計算に基づき、ここで笑わせようといった予測が含まれている。偶然起きたものではない。ユーモラスな状況は、偶然起きたものでも良い。
- ・ ユーモアは、聴衆の固定概念や期待などの、固まった考えからずれたことを発言者が発言することによって生まれる。ギャップが引き起こす。
- ・ ユーモアは主観的に見れば絶望的な状況を客観視して、相対化させることで、余裕を持たせる。主観と客観のずれに面白さを感じる。深刻な状況を笑って受け止めることが出来るのは人間独自の性質である。毒を浄化する働きがある。親鸞の悪人正機説と通じるものがあるそうだ。
- ・ ユーモアを含む言葉としてブラックユーモアがあるが、ユーモアと大分異なる。

### 2. ブラックユーモアについて

- ・ ニヒリスティックでシニカル（冷笑的）である。実際の世の中の恐ろしさを示す。攻撃性、危険性がある。
- ・ 予定調和ではなく、相対化するという点ではユーモアと共通性がある。

- タブーや道徳のような、のしかかってくるものをひっくり返す痛快さがある。主観から抜け出さないと笑えない。
- タブーは怖いため、目をそらしてしまうが、ブラックユーモアによってタブーを直視することが出来る。
- タブーを客観視する余裕がないと笑えないので、余裕があるかどうか分かる。
- タブーなどの背景を内在化できないと笑えない。
- 怒りを抑えたり、悔しさを笑い飛ばしたりする。不満のガス抜きや、溜飲を下げる効果がある。度が過ぎると、ブラックユーモアにより現状に対する不満を押さえ込んでしまい、結果として現状を改善する機会を失う。
- ブラックユーモアにはユーモアのような温かみがない。ブラックなことを表現するときに、いい意味で使われるユーモアという言葉を使って、さもいいものであるかのようにカモフラージュしたものがブラックユーモアである。

ユーモア、ブラックユーモアの実例として、以下が挙げた。

ユーモア：夏目漱石「吾輩は猫である」、赤塚不二夫「天才バカボン」の「これでいいのだ」、植木等「わかっちゃいるけどやめられない」

ブラックユーモア：芥川龍之介「鼻蔵人」、同「猿蟹合戦」、ビートたけし「赤信号、みんな渡れば怖くない」